

「令和の日本型学校教育」の実現に向けた通信制高等学校の
在り方に関する調査研究協力者会議（第3回）
意見概要

- 対面による指導を重視した教育活動に取り組む学校は、面接指導をいかに充実させていくかということが大きなポイントではないか。
- 対面による指導を重視した教育活動に取り組む学校では、添削課題に取り組むのは「主体的な学び」であり、主体的な学びを促すような面接指導であってほしい。また、面接指導では、実際に生徒が集まっているので、できるだけ「協働的な学び」を入れていく活動をしてほしい。
- いろいろな理由で協働的な学びに参加することが困難な生徒がいるが、そのような生徒に対してICTを活用したリアルな参加ができるよう工夫をする必要があるのではないか。
- 実施校の責任において、面接指導施設等においても実施校と同程度の質を確保してほしい。
- 対面による指導を重視した学校は、面接指導時に生徒とのつながりをつくっていくことになるので、ここが大きなポイントとなる。
- 学校による自己評価、学校関係者評価、第三者評価というような形で、学校評価システムをきちんと活用することによって、実施校、設置者自体が主体的な改善活動を回していく必要がある。
- 所轄庁は、学校評価システムを活用して、各学校の実態把握を行い、必要な指導・助言等を与えていけばいいのではないか。
- ガイドラインをベースにした評価項目をきちんと作って、場合によってはある程度全国で統一的な評価項目を作って、そのような評価項目を基に学校が自主点検し、不十分なところは改善していくという流れをつくりながら、所轄庁がその実態把握をしていくということができれば、学校自身が良い教育活動を行うための工夫できるのではないか。
- 主にICT（ネット）を活用した教育に取り組む学校は、新しい通信制高校の在り方、特にデジタルトランスフォーメーションを取り込んだ新しい形をつくってくれる可能性があるのではないか。
- 主にICT（ネット）を活用した教育に取り組む学校の場合は、面接指導でもきちんとした主体的な学びができるような伴走をしていかなければいけないので視聴報告書があるが、この視聴報告書を使って生徒が主体的な学びができるような工夫がなされるといいのではないか。
- 主にICT（ネット）を活用した教育に取り組む学校の場合は、生徒に対してチームで指導にあたるという形がメインになるイメージであり、そのチームの中での情報共有がいかにきちんとできるのかというのも大きなポイントではないか。

- 主にICT（ネット）を活用した教育に取り組む学校の大きな特徴だが、様々なコミュニケーションツールを使って生徒とのつながりを大切にしており、このコミュニケーションツールが生徒にとってはすごく入りやすく、先生と生徒の間でつながりが生まれやすい。
- 対面による指導を重視した教育活動に取り組む学校においてもICT（ネット）を活用した教育に取り組む学校においても、通信制高校の強みをいかすためのリアルな質向上が大切である。通信制高校のハードルを高くするということではなく、強みの一つである例えばセーフティネットとしての機能をしっかりといかすために、こういったリアルをやっつけていかなければならないのかということを考えていくことが大切である。
- 添削課題をメインに置くのではなく、リアルな学びの場というのをメインに考える必要がある。リアルな学びの場で何をどのように評価をしていきたいのかということを考えて、そのために添削課題はどうあるべきで、そのためには主体的な学びの場をどのように評価していくのかということを考えていくべきだ。
- リアルな学びの場を通してこういった学びを構築していくのかというような学びの体系化といったことが課題である。
- ICTを有効に使っていくためにも、リアルな学びの場をどうしていくのかということをしきんと考えていくべきで、何が何でもICTを使うということでICTだけがクローズアップされるのはよくない。オンラインで抜け落ちている部分をいかにリアルできちんと補足してあげるのかということはずごく大切。数少ないリアルをどういかに、どう評価していくのかということがポイントである。
- 通信制高校の底上げ、条件整備というのは非常に必要になっており、学校評価システムを活用するときには、複数の評価を組み合わせる必要があるだろう。共通的な指標、チェック項目でその課題を発見するという学校評価は維持しつつ、それぞれ学校ごとに重点目標を設定してその改善に向けた評価をすることが必要。目標に応じた身に付けさせた力についてきちんと身に付いているかということ測定しなければならないが、これが難しいので、まず最低限の部分のチェックということを明確に打ち出していくような評価システムを実現する、項目を共通化することで都道府県を越えた確認、チェックというのができるようにしていくということ迅速にやるべきだ。
- 通信制高校だけでなく高校教育全体の話になるが、高校教育では選抜をしているという関係から高等学校の独自性や個性があるが、一方で我が国の高等学校教育の共通性は何なのかということが高等教育を考えるときに永遠のテーマとして出てくるが、その共通性というものの自体が少し変わりつつあるのではないか。
- 通信制高校だけの課題ではなくて、高校全体で高卒というものをどう担保していくのかという議論の中で、学びの基礎診断をどのように活用するのか、あるいは活用するべきかどうかというのは考えても良いことではないか。
- 面接指導と添削指導がゼロサムのようなものになってしまっているということが観察できるとするならば、面接指導や添削指導を倍にすればゼロサムでもそのくらいで丁度よくなるのではないかと考えることはできないか。
- PT比の問題で、消費者保護という観点から世間にそれぞれの学校が当然に開示すべき

情報としてガイドラインのようなものに盛り込んでおけば良い。

- それぞれの学校が教育の質を高めていくためには、学力測定のような形をとって、それを踏まえて何が必要なのかというところに立ち戻って質を高めていくことが大切である。その結果として、ICTをどのように活用していくのか、メディアをどのように活用していくのか、スクーリング回数はどうなのかということを検討していけるのではないか。
- 面接指導や添削指導の量を倍にしても問題は解決しないのではないか。量を倍にすることで、通信制が持っている強みが減ってくるのではないか。通信制の良い面を残しつつ、いかに質を上げていくのかということが一番大きなポイントである。
- 面接指導、添削指導というネーミングそのものが令和の時代に合うのかという気がしている。面接指導、添削指導をいかに一体化して教育活動を行うかということを考えていかなければならない。
- 面接指導、添削指導、試験といった在り方そのものがそろそろ変わってもいいのではないか。対面及びリアルでやるべきことは何なのか、ICTなどオンラインでできることは何なのか、教育の中でどのようにツールを使いながら役割分担して教育の質を高めていくのか、といったように教育の中でリアルとオンラインの目指すべきものを本質的に考える必要がある。
- 学びの基礎診断を通信制課程だけに課していくのは非常に厳しいのではないか。
- 生徒の学びがそれぞれの学校できちんと実現しているのか、お金を払った分きちんとそれに見合った教育が行われているのかといった消費者保護の視点も大切である。
- 面接指導なのか添削指導なのかよくわからなくなっている学校があるといった問題について、ほかの制度では対応できず、学校評価などを絡めて性善説で何とかしていこうということなのか、それとも別の制度をつくれればこの問題は対応可能なのかということについて深めていきたい。

※本会議の委員以外の者の発言を除く。